詩佛の再北遊と加越能文人たち (その三)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/46389

詩佛の再北遊と加越能文人たち（その三）

畑中　榮

3．十月の小集

a．近水楼・璞齋亭小集等

初冬十月三日は雨だったが、詩佛を近水楼に迎えて詩宴が持たれた。参加者は緑陰・鶴山・富田菁莪・西皐・空翠に加えて越中からは津島東亭も参加した。東亭は詩佛を有磯の松林で迎えた人である。近水楼は所在を明らかにせぬが、空翠詩等によれば、東山の下、浅野川辺りの茶屋街にあったように思える。緑陰詩にいう（附20）。

與詩佛先生飲近水楼　　香林坊緑陰

似離城市裏。　俯仰一塵無
寒雨山看洗。　丹楓錦不如。
水聲秋閣静。　断雁夜窗虚。
来此伴吟友。　暫與世間疎。

城市の裏を離るる似く、俯仰に一塵なし
寒雨は山看を洗ひ、丹楓は錦もしかず。
水聲は秋閣に静かに、断雁は夜窓に虚なり。
此に来て吟友に伴へば、暫く世間と疎なり。

城郭から僅かに離れただけで、世俗から遠く離れた場所に出る。初冬の冷たい雨は欄外の眺めを洗い清め、楓の紅さは錦以上に鮮やかである。秋閣には川流の音がほのかに耳に達し、雁の声も窓外から切れ切れに聞こえてくる。こうして吟友と共に心を澄ませておれば、世間のわずらわしさも忘れてしまうのだ、と。

雨は四日には晴れて、初夜頃までは清明の天だったが、夜半よりまた雨に変わった。そんな夜、新月を賞でて大隅璞齋の払雲館で小集がもたれた（注1）。璞齋は金沢の家柄町人であった九代目森下屋八左衛門である。算用聞役を仰せつけられ、お目見えを許されて家柄町人となったが、文政九年（一八二六）八月三十五歳で没した。詩書畫を嗜み、竹石を描くのを最も得意としてこの人の竹石図に詩佛が讃した作が幾つも残るという。初め河北郡森下村に住んだが、後、金沢の紺屋坂に居を移してそこに住んだ。紺屋坂は現在の兼六園の入り口の坂である。

この小集の参加者に林蓀坡の外に緑陰・鶴山・西皐も数えるが、彼等は全て加賀藩で指を屈する町人達である。そして璞齋の作に「同社相ひ倶に弊廬に邀ふ」とあるように（附69）、この人々に加えて空翠社中の人々も多数参加していた。詩佛の作にいう（78）。「雲帷を捲き盡して雨の霽るる時。纎々たる清影は看るに偏へに奇し。天公の好色を君知るや否や。月姉に新たに描く京兆の眉」と。「月姉」は嫦娥のことで、月に住む女神。また「京兆の眉」とは、漢の京兆尹であった張敞が妻のために眉を画いたという故事。空にある月は、京兆尹張敞が妻のために眉を描いて慈しんだように、好色の天帝が嫦娥のために描いた眉なんだよと。大森林造氏もいわれるように（注2）、この奇抜な着想は、一座の驚嘆と喝采を浴びたに違いない。

これを受けて鶴山は、「嫦娥は鏡に臨みて眉痕を畫き、粧閣は新たに開きて斂昏に在り。乍ち斜陽に相ひ映帶せらる」と応じた（附28）。この月は女神嫦娥が描く眉で、女神の肌を艶々しく映し出すのは化粧室に注ぎ入る黄昏の斜陽だ、と。そして緑陰はまた次のように詠う（附22）。

璞齋小集賦新月　香林坊緑陰

纎々新月在楼隅　纎々たる新月は楼の隅に在り。
纎隔風簾影欲無　纎に風簾を隔てて影無からんと欲す。
争得妙工如顧陸　争か妙工の顧陸の如きを得て。
寫成白燕覓巣図　白燕の巣を覓むる図を寫し成さん。

日没前、晩秋の夕空は泣きたくなるほど鮮やかな群青に輝く。そんな夕空を、薄紅に頬を染めた夕焼けが、払雲館の楼閣を一瞬照らしたかと思うと、その夕陽の残り陽がゆっくりと薄れて行く。するとあるかなきかの新月が恥じらうように西空に顔を覗かせるのだ。簾が風に揺れ、その向こうには秋に残った紅楓が風に揺れている。このあえかな新月は、顧凱子や陸探微の画才をもってしか写し得ないと。「白燕」は尾の白い燕で新月の状の喩え。なお顧凱子は、博学才穎にして図絵を能くし、才絶・畫絶・痴絶の三絶ありといわれ、陸探微も人物・山水を善くした画人である。

その後降り続いた雨が八日には曇りとなり、九日になってようやく小春らしい陽気が戻った。小野丹霞が詩佛を訪れたのはそんな時である。丹霞はいう。「風聲颯々小春の初。憐殺す、風光尚ほ未だ疎ならざるを。山は旧粧を改めて朝に雪を帯び、樹は新たに染むるによりて晩に車を留む」と（附87）。平地では雨だった天候も、山では雪だったのである。遠くに見える千メートル級の山々の嶺は白く雪を戴き、それでも下界では秋が梢の紅葉に散り残り、錦繡の彩りとはまた違った趣を見せていた。しかし冬の訪れは確実に詩佛の旅立ちの近いことをも示していた。丹霞が詠う。「却って悲しむ　先生帰去む後、俗人来りて壁間の書を汚さんことを」と。詩佛の帰去を惜しんでの来訪であった。（注3）

b. 詩佛送別の日々

九日の小春も翌十日にはまた雨となって霰も混じった。詩佛送別の宴が持たれたのはそんな冬ざれの中である。致堂・西皐・立齋・武蔵鶴亭・中村碧山に加えて空翠社中のメンバーも多数参加した。鶴亭・碧山は初出であるが、碧山は西皐の四弟で、父や兄伊東半仙

と共に空翠社中にあった。また鶴亭は下堤町にいた家柄町人の武蔵規一郎。この時の鶴亭の作に、「懐ふ昔、先生我が州に到るも。我方に病に臥して見るに由なし」とあるように、病のため役職を休んでいたため前回の北遊の際は詩佛に会えなかった。それが文政七年には癒えて再び家柄町人に任じられたと、安政七年の「家柄町人由緒略歴」にある。碧山の作にいう（附66）。

奉送詩佛先生帰江戸　中村碧山

軽煙淡靄鎖前村　軽煙淡靄は前村を鎖し。
拍々秋流岸有痕　拍々と秋は流りて岸に痕有り。
自此醉愁君去後　此より醉ひて愁へん　君去りて後。
満城風雪昼昏々　満城の風雪は昼も昏々たらん。

十日に降った霰は翌日には初雪となり、この宴の行われた頃には雪は城下の地面を覆ったのであろう。北陸では秋は拍々と家の軒を打ち付け、激しく風を吹かせて過ぎて行く。かくしてやってくる雪にすっぽりと覆われる北陸の冬にあって、詩佛の去った後の空虚をどうして埋めればよいかと歎いたのである。

次の致堂の作もこの頃のものである。雲が岫（洞穴）に帰るのを留め得ず、東に流れる川流を休めさせることができないように、東帰する詩佛を留め得ぬ辛さをいかんともしがたいと詠じた。

送詩佛先生還荏土　横山致堂

白雲帰岫挽難留　白雲の岫に帰るを挽けども留め難し。
碧水向東流不休　碧水は東に向い流れて休まず。
離筵争免酸辛意　離筵には争でか免かれん　酸辛の意を。
別恨空追汗漫遊　別恨には空しく追ふ　汗漫の遊びを。

酒有残樽応盡醉　酒に残樽ありて応に醉いを盡すべくも。
詩無傑句只裁愁　詩には傑句なくして只だ愁を裁つのみ。
他時若思交情切　他時若し交情の切なるを思はば。
一雁莫忘書遠投　一雁忘るることな　書を遠く投ずるを。

送別の宴（離筵）では別れの辛さを免れず、別れを恨んではこの詩遊もただ心うつろに過ぎて行くだけである。酒は醉うには十分ではあるが、傑句もない作はただ愁いを漫然と綴るのみである。いつの日か、もし私のこの切なる情を思い出すことがあれば、遠い加賀の地に一通でも便りのあらんことを、と。

伊東橘窗が尋ねてきたのもこの雪の中である。「短蓑小笠に雪翩々。已に楼頭に到りて望み渺然」と。蓑や笠に雪がちらちら舞かかり、少し小高い空翠楼から眺めると、雪に覆われた街並みが、渺々と広がっている。橘窗が続ける。「試問す、梅花は何処にか発くと。先生は指點す、小渓の辺りを」と（附48）。この眼下に白々とした景色が広がるのは、大庾嶺の一萬株の梅がいっせいに花を開かせているのではないかと、示したのである。これは白楽天の「雪中即事答微之」の「銀河沙張る三千里、梅嶺花拝く一萬株」を念頭に置いたもの。この一面に降り積もった白雪は、天の河の白い銀沙を三千里にわたって敷き広げたもので、また庾嶺の一萬株の梅の花がいっせいに花開いたようではないか、と。そしたら詩佛は莞爾として応えた。「ほらその小川のチロチロと流れているそこに咲きかかっているではないか」と。早梅が楼の檐にも咲いていたのである。白楽天の「春至香山寺」の「白片の落梅は澗水に浮かぶ。黄梢の新柳は城墻より出でたり」を念頭に置いたもの。梅の白い花びらが谷川に

浮かび、柳の若芽は町の築土の上から枝を差し出している、と。橘窗は「詩佛よ、あなたは梅の咲く東土に帰るのですね」と別れを滲ませると、詩佛は「梅ならほらここにあるではないですか」と応えたのである。

前田土佐守直時の延年楼で送別の詩宴が持たれたのもこの頃である。直時は詩文を能くしたとも伝わらぬが、当代を時めかす詩佛来訪を知って敬意を払ったものであろうか。その延年楼は三層の楼閣になり、二層と三層には各々欄干を持って窓がしつらえてあり、珠簾を透かしてくる風は蓬莱島のもののように汚れも通さないと詩佛はいう。「人間の萬事は相ひ関せず。人間に住むと雖も便ち是れ仙。試みに延年楼上にて看れば。半日の光陰も一年に抵る」と（79）。

この氷雨が小春の陽ざしに変わったのは十四日になってで、この陽気の中に希丸堂で小集がもたれた。詩佛・鶴山・商齋の両宮竹屋等が参加し、短か日をいとおしんで、茶酒珍膳を肴に詩佛との賦詩の時間を楽しんだ（附31）。

希丸宅小集　　亀田鶴山

牢晴気候似春回　　牢晴の気候は春の回るに似たり。
小閣垂簾無點塵　　小閣に簾を垂れて點塵無し。
籬菊猶留秋色在　　籬菊は猶ほ秋色を留めて在り。
檐梅已破早寒来　　檐梅は已に早寒を破りて来たる。
幾盤蝦菜添詩料　　幾盤かの蝦菜は詩の料を添へ。
一味茶香妨睡媒　　一味の茶香は睡媒を妨ぐ。
酒正熟時應醉倒　　酒は正に熟する時なり、應に醉倒すべし。
何須短景苦相催　　何ぞ須ひん、短景の苦に相ひ催すを。

籬には秋菊が残り、軒先では梅も咲いていた。御膳に並ぶ酒肴は賦詩を助け、食後のお茶は心を爽やかにしてくれる。初冬は新酒が醸し出される時である。どうして冬の短か日を嘆くことがあろうか、と（注4）。

C. 鹿心齋小集

この小春の陽気も昼までで、夜に変わった雨は十五日まで続いた。鶴山の鹿心齋で送別の詩宴が持たれたのは、そんな時である。空翠・商齋に加えて出口東渓も参加した。鶴山が詠う。「昨を憶ふ、温泉に我と同に浴せしを。即今は風雪に君が行くを送る。山川千里、分攜の後。何れの日にか相ひ逢ふて舊盟を尋ねん」と（附32）。詩佛が滞在した三ヶ月間の日々を回想し、千里に袂を分かって（分攜）より後、今後は誰と共に清遊すべきかと惜しんだのである。これに応えて詩佛が詠う（82）。

鹿心齋飲別諸子　　詩佛

擔頭挑得一張琴　　擔頭して挑み得たり一張の琴。
再到金城為賞音　　再び金城に到るは賞音の為なり。
月白風清秋已過　　月白く風清くして秋は已に過ぎ。
水流山聳雪将深　　水は流れ山は聳えて雪は将に深からんとす。
巖前閑聽灘聲睡　　巖前には閑に灘聲を聴きつつ睡り。
楼上與和松籟吟　　楼上には與に松籟に和して吟ず。
従此断絃鎖塵匣　　此従りは　絃を断ちて塵匣を鎖し。
相思唯合夢魂尋　　相ひ思ひて唯だ合に夢魂に尋ぬべし。

自分が金城に来たのは、自分の弾く琴の音を理解してくれる皆さんのためである。知音者である金城諸子があればこそ、月清風白の秋もまたたく間に過ぎ、いつの間にか山に雪を戴く頃となってしまった。金沢を出てより後は琴の弦を断って世俗の交わりを止め、夢の中でのみ皆さんとの清遊を楽しみましょう、と。知音者であった鍾子期の死と共に白牙が琴の絃を断って弾琴を止めた故事を下に敷いて、金城諸子との別れを悲しんでみせたもの。時に参加していた商齋も別れの淋しさを訴える（附86）。「久客の帰思の切なるを憐ぶために。深杯を把るといへども離恨は長し。野店の寒煙は旅宿を迷はし。関山の夜月は行装を照らす。人生は畢竟定め難きを知る。談笑して端なくも涙数行す」と。かくして彼等にとって別れの日は、一日毎に迫って来るのであった。

鶴山は、文人との誼をよくした家柄町人で、宮竹屋本家の七代目である。金沢片町の日抜き通りに薬屋を営み、分家の酒造を営む宮竹屋商齋と店を並べていた。この鹿心齋にはよく茶会が催されたらしく、三年前北遊した詩佛を迎えた時も、山中温泉の帰りここで茶会を催している。その時の記録をかつて私もまとめている（注5）。ここではその時の茶会兼詩佛歓迎の宴の模様を概略しておきたい。

待合いは鶴山の隠居所である。炉には霰なた造りの釜（注6）、織部の香合に龍眼肉籠の菜籠（炭斗）、水指は七宝の烏帽子形、書斎の床掛けは檀之瑞の竹の画で、書机の上には蓬莱硯・唐物の文庫・青磁の硯屏・瑠璃石天鵞文鎮や唐銅獅子文鎮等を置いた。そして袋棚には蒟醤の長盆（注6）に朝川同齋の巻物、居間の床には明の凌雲翰の「花鳥の絵」の掛け軸を飾った。

本席には座敷をあて、その床には明の陳白沙の掛軸を置いた。白沙は献章の号で、書を巧みとして毛筆を使わず茅を束ねて書した人。書院には皮氈を敷き、その上に岩の硯・水蒼玉の硯屏・阿蘭陀焼の墨乗・青磁筆荷（架）と水滴（注6）・堆朱の筆二本（注6）と南京筆を一本・仙煉紙・水蒼玉の痴龍の文鎮を並べ、座敷には酒宗より借用した毯子を敷き、茶席の後の宴席では萌黄の羅氈を敷いた。床には唐物の青貝の長盆に祝枝山領中八仙の巻物を入れて置き、袋棚の上には青貝の面々の硯箱、板床には道山施晋山水の懸軸、炉には与次郎座阿弥陀製の釜を置いた。更に床の脇には刀懸、白高麗六角の香合、朝鮮蕎麦茶碗や古萩の了入黒茶碗、溜塗りの大棗、字入楽の水指等を並べた。

次いで宴席。お膳には、吸い物と薄味噌仕立ての鯛に山椒の粉をふった高麗の手碗、ウニのはべん・川茸・きんかんを取り合わせた小蓋、鯛の作り身に焼塩を添えた南京波の絵の鉢、嫁菜のおひたしと花生姜をあわせた黄南京鉢を置いた。この膳が終えると、青貝の大重に海老のうしお汁を入れて空いた吸い物椀に注ぎ、鉢組大盆には、仁清の角小丼に花鰹をふりかけた塩かづのこ、南京傘画の鉢には野母良（ボラか）、青磁の手桶には鰹の塩から、これに鉢・箸立て・散れんげ（料理を掬う容器）を載せて回した。更に青磁の八角鉢には蟹、その横の菊の皿に焼き塩、また南京の菊葉小皿を萩の広ふたに載せて出し、唐物の角盆にはギヤマンのコップや南京染付の荷葉の盃を取り分けのために出した。

こうして一通りが終えたら二の膳である。吸い物に引き代えて、碗には鴨・ぜんまい・葉付きかぶらの熱物（羹）、赤絵小皿には下に

焼き塩を敷いた焼ばい貝、古伊万里の赤絵皿には立貝・針生姜・塩引・木くらげ、煮物には葛あんにわさびを上に載せた鴨うり、焼きものには塩鯛、加えて塩たら・塩芝茸・焼蕗のとうを入れたすまし汁をご飯と共に出した。食事が終わって御湯とお茶が振る舞われ、広葉として梅形木彫盆に木目羊羹にクロモジを二本つけて出した。

そして最後に三の膳だったろうか、生子の姜汁の吸物に加えて、高麗鉢に甲いかのウニ焼・わさび・かすつけを置き、また乾山の角鉢には雉子の焼きもの、桃の画鉢にはみかんを取り添え、口直しだったろうか、大根おろしを添えたそうめんで締めくくっている。

以上が記録に残された、詩佛参加による鶴山の茶会の略述である。今回、方々で開かれた詩佛送別の小集や詩宴もこうした茶会を伴うものであったろう。茶道具や敷物、食材のみならず食器の一つ一つに至るまで、贅を尽くし珍品を揃えてもてなしたのである。

この後雨も夜には止んで、翌十六日から十八日までは曇りだった。そんな頃、岩竹潭が詩佛を亀田商齋の宮竹屋に案内してきた。商齋は加賀明倫堂助教林翼の次男で名を景任といい、川南町に酒造を業としていた亀田甚右衛門の養子となり、七右衛門を称した。本年、六十歳となって金沢町奉行の下役となっていた。漢詩・和歌・俳諧を能くし、温厚で客を好む人柄は文人墨客の来訪を絶やさなかった。

詩佛はこの宮竹屋の酒を殊に愛し、山中温泉に遊んだ時もこれを持参したほどだった。『詩聖堂詩集』巻八「山中温泉雑咏」にいう。「朝に南隣を訪ひ、暮に北隣。相ひ逢ふて尽くすは是、意中の人。丹蝦紫蟹、宮家の醸。識らず山中に両旬を過すを」と。商齋は詩佛が山中にあっても酒を絶やさないように送り続けたのである。

時に商齋が詠う。（商齋30）

巖竹潭君拉詩佛先生見訪賦呈　亀田商齋

市井景光何足多　市井の景光は何ぞ多とするに足らん。
瓶中劣挿数枝花　瓶中に劣かに挿す数枝の花。
迎君唯愧乏雞黍　君を迎へて唯だ愧づ雞黍に乏しきことを。
卸榻先煎一鼎茶　榻を卸して先づ煎る一鼎の茶。

「雞黍」はもてなし料理である。たいしたおもてなしもできないがといいながら、よく清掃の行き届いた玄関口には水を打って香を焚き、壁には数枝の花を挿した花瓶をそれとなく置き、詩佛が車から降りるや「先ず一服」といって茶室に招き入れたのである。

詩佛が愛した宮竹屋の酒を「菊一」という。菊花を醸してあって、喉を過ぎた後ほのかに菊の香りが口に漂ったという。味が濃く、清んだ白色で口に入れるとピリッと辛く、酔後はカラッとして後に残らなかったと詩佛はいう。別に鶴来には銘酒「菊酒」もあったが、これは盃の残瀝が底に集まった時、それが菊花の状であったことより命名された。次はこの「菊一」を詠じた詩佛の作である（81）。

題宮竹氏菊一酒　詩佛

宮氏家醸號菊一　宮氏の家醸を菊一と號す。
醸得菊花別一方　菊花を醸し得て一方を別にす。
色似鵞児破殻出　色は鵞児の殻を破りて出づるに似て。
釅烈猶帯九日香　釅烈として猶ほ帯ぶ九日の香。
我来金城留数月　我金城に来りて留ること数月。
日々爛酔酒為郷　日々爛酔して酒を郷と為す。
酔中援筆題詩句　酔中筆を援けて詩句を題し。

龍蛇飛動風雨狂　龍蛇は飛動して風雨狂ふ。
欲知此酒大功徳　此の酒の大功徳を知らんと欲へば。
明日不用解醒湯　明日は用ひず、解醒湯。

「九日の香」は菊の香り、「解醒湯」は宿酔を醒ます薬。詩佛は金沢に来て数ヶ月、毎日この酒を酔郷として愛飲し、酔っては詩を賦し水墨をもって書畫の筆を揮った。何よりもこの酒の一番いい所は、宿酔をさせぬところである、と。〔注7〕

d. その他十八日までの小集

この後も詩佛は慌ただしく動き回る。齋藤氏の所有する井筒の「石欄」と称する石の手すりを観に出向いて「一体だれであろうか、一夜のうちにこの石欄を齋藤氏の庭に移し来たるは。これを茶室の井戸の上に置いて暁に看ると、石欄にこもる気がその面に雲を生じているのが見える」と賦与し（83）、西皐・緑陰等の参加による小集に出向いて「看梅」「冬夜」の出題をした。緑陰の「冬夜」にいう（附25）。「落葉は窓を打ちて風は乍ち起こり。奔雷は地に響きて雨は頻に連なる。衾に擁りて更に覚ゆ、寒威の逼れるを。晨光の樹顛に上るを等候す」と。北陸の、寒く長い冬に飽きて、温かい朝日が樹木の頂に登る日の来ることを、ひたすら待ちわびると詠じたもの。「等候」は待ち受けるの意味である。

これまでの曇りが十八日の午前には、風が冷たかったが晴れた。しかし北陸らしい冬はやがて午後には曇り、夕方頃から雨を降らせ夜半には大荒れとなり霰も混じった。四屏楼に詩佛送別の宴が急遽持ち上がったのはそんな中である。参加者は空翠・鶴山・西皐であるが、これはたまたま集まった人が興に乗じて出かけたからである。時に鶴山が詠う（附30）。

同登四併楼用先生四年前韻賦即景　亀田鶴山

興出偶然非有約　興は偶然に出でて約あるに非ず。
黄公壚上酒方濃　黄公の壚の上には酒は方に濃かなり。
雨邊斜日晴邊雨　雨邊の斜日、晴邊の雨。
一霎浮沈八九峰　一霎で浮沈す八九峰。

雨が降ったかと思えば夕陽が射し、晴れていたかと思えばまた雨となる。この小雨によって窓外の八九峰は見え隠れした。なお「黄公壚」は黄公が酒を飲んだ庵で、ここは四併楼をいう。〔注8〕

そして十八日の夜中になって大荒れとなった天候は北陸に雪をもたらして暫く止まず、街には雪も積もった。この風が止んで穏やかさを回復したのは二十二日になってからであるが、寒暖を交互に繰り返しながら北陸の冬は確実に雪を連れて来た。この陽気がようやく晴れ間に転じたのは、十一月一日になってからである。

e. 十月中の小集

この間詩佛送別の宴が持たれなかったとはとうてい思えない。むしろ宴の持たれなかった日を探すことの方が難しかったろうが、残念ながらそれを示す作が全くない。富田痴龍・鶴坡親子が詩佛のために送別の宴を設けた作に僅かに伺えるのみである（附19）

孟冬送詩佛先生　富田鶴坡

懐昨紅楓設宴迎　懐昨　紅楓に宴を設けて迎へしを。
忽吹隊葉送帰程　忽ち隊葉を吹きて帰程を送る。
飄然身與野雲去　飄然として身は野雲と與に去り。
澹泊心追江水行　澹泊の心は江水を追ひて行く。
挽袂絶難留短晷　袂を挽くも　絶だ短晷を留め難し。
臨岐毎自問重盟　岐に臨みて毎に自ら重盟を問ふ。
関山縦隔幾千里　関山は縦ひ幾千里を隔つとも。
不妨鴻魚寄舊情　妨げず　鴻魚の舊情を寄すを。

「隊葉」は落ち葉、「澹泊」は淡泊で無欲の心、「江水」は流れる川であるがここでは江戸に帰る詩佛を指す。「短晷」は冬の短か日、「関山」は帰程にある関所や山々、「鴻魚」は偉大な魚をいい、ここは詩佛を指す。楓葉の秋に歓迎の宴を張ったかと思えば、落ち葉の冬と共にその帰程を見送らねばならぬ。その袂をとって引き留めようとしても冬の短か日と同じく留めがたい。だから今、別れに際して重盟を問いたい、たとえ江戸とはどれだけ遠くに関所や山々を隔つとも、どうぞ今後も舊情を寄せて頂きたいと(注9)

4. 十一月——詩佛帰東

a. 青山亭で送別の宴

十一月二日は冬至だった。曇りだったが前日に続いて長閑な天候で、藩士達は冬至祭を行って一年間の厄を祓い一陽来復のあることを祈った。翌三日は雨になったが、金沢を発つ詩佛を送る宴が青山亭で持たれた。緑陰・鶴山・西園・暁山等の常連の他、片岡春耕・二木竹窓・毎田菊荘・平井石泉の名前も掲げる。しかし詩佛も「満城の詩盟出でて行くを送る」というように(85)、これまで詩佛と関わった文人の殆どがこの青山亭に集まったのではなかろうか。二木竹窓は、金沢能越町の医師二木元順直清の嫡男である。文政四年藩から給録を付与された給人組手医師に呼び出されて五人扶持を賜り、同五年四月に二人扶持を加えたが、同七年十二月に病没した。詩佛を見送って間もなくの没であった。

次は暁山の作であるが、夜を徹して行われた留別の宴が果て、その後の灰に覆われた囲炉裏の火と枕を吹き冷ます夜半の寒風は、いやが上にも詩佛を失う喪失感をにじませる。やがて蕭蕭として江上の葭を吹き鳴らした北風は楊柳に吹き荒び、別れ難い情は「依依」として名残を断たなかったのである(附39)。

奉送詩佛先生帰荏土　木谷暁山

山色濛々雪欲飛　山色は濛々として雪は飛ばんと欲。
可堪明日送君帰　堪ふべけんや、明日君の帰るを送るに。
爐頭灰冷風侵枕　爐頭に灰は冷まじくして風は枕を侵し。
燈下夢醒寒透衣　燈下に夢は醒めて寒さは衣に透る。
江上蒹葭空蕭蕭　江上の蒹葭は空しく蕭蕭たり。
路邊楊柳更依依　路邊の楊柳は更に依依たり。
旗亭一醉情難盡　旗亭の一醉は情を盡し難く。
従是笈談千里遠　是より笈談は千里に遠からん。

ついでにもう一首、平井石泉の作も載せる(附91)。この人も伝を詳らかにせぬが、『燕台風雅』巻七に医を業として傍ら詩を能くした

平井尚友を掲げるが、石泉はこの人の譜を嗣ぐ人であったろうか。或いは大聖寺藩士で時習館会頭となり『平井復齋詩稿』等の作を遺した平井復齋もいるが、この人の父祖でもあったろうか。

奉送詩佛先生帰荏土　平井石泉

短長亭子東西路　短長の亭子　東西の路。
今日誰堪涙正傾　今日誰か堪へん　涙正に傾くに。
寒柳綰枝頻借別　寒柳に枝を綰びて頻りに別れを借しみ。
清歌了曲不勝情　清歌　曲了るも情に勝へず。
一樽酌處人難醉　一樽を酌む處　人醉ひ難く。
匹馬嘶邊鈴有聲　匹馬嘶く邊り　鈴に聲有り。
聚散浮雲本無定　聚散浮雲　本定めなし。
何時又得見先生　何れの時か又　先生に見ゆることを得ん。

道は東西に通じ、そこに駅亭が建つ。今日青山亭で詩佛との別れの宴を持ち、柳の枝を結び別れの曲を奏でるが惜別の情に堪えない。淋しさに酒を飲むが、飲んでも飲んでも酔うことも出来ず、ふと気がつくと駅馬も悲しそうに鳴いている。人生浮雲のごとく集散定めないものである。この後果たしていつ先生に会えるだろうか、と。ここに集まった人々の心情を述べて余りあるであろう。(注10)

b. 松任・小松

青山亭を発ったのは何時頃だったのだろうか。四日は雨雪となり日中でも家の中は夜のように暗く、霰混じりの風が吹き荒れて寒さは骨にまで徹った。そんな中、松任に向かう詩佛の輿を、空翠・鶴山等の社中の人々が追いかけてきた。惜別の情忍びがたく、せめて松任までと追って来たのである。金沢から松任までは僅か二里余りの距離である。荒天のせいもあったのだろうか、青山亭を発つのが遅かったからであろうか、追いかけてくる人々の思いに応えたのだろうか、早々に松任駅で泊った。鶴山が詠う（附36）。

送到松任駅宿　田鶴山

相送一程還一程　相ひ送りて一程　還た一程。
人生難忍是離情　人生忍び難きは是れ離情。
軽輿雇得俱投宿　軽輿雇ひ得て俱に投宿す。
話到隣鷄第二聲　話りて隣鷄の第二聲に到る。

青山亭で見送った彼等だったが、追懐の情止みがたくせめて松任まで送って来たのである。何人いたかは知れぬが、空翠社中の人々が多数参加していたであろう。空翠の作にもいう（附165）。

詩佛先生来金沢寓予家数閲月今将別送到松任駅　空翠

侵雪送来金沢西　雪を侵して送り来る金沢の西。
通宵燒燭到晨雞　通宵　燭を焼きて晨雞に到る。
欲知他日此行盛　他日　此の行の盛んなるを知らんと欲せば。
請看長亭滿壁題　請ふ看よ　長亭に滿壁の題を。

送別の宴は、松任駅においても夜を徹して行われ、晨朝に到った。この会の盛大さといったら、長亭の壁いっぱいに書された題詩の数によっても明らかであろう、と。

松任駅でいわば送別の宴の二次会に酔いしれている間中も、外では荒れ模様が止まず、夜中には雪となっていた。しかしそれも翌五日には止んで空は晴れ、戸を開けると一面純白の雪が世界を変えて

いた。眼前に崢嶸と聳える白山連峰も、その裾に連なる高三郎山・大倉山・医王山の峰々も、更にはこれから歩を進めて行く小松方面に聳える大日や大倉岳の峰々も、全てが白玉に輝く屏風を広げたようで、地は萬斛の瓊沙を敷き詰めたようであった。そんな雪の中を墨屏・空翠・暁山・芝圃の四人が更に小松までと随行した（85）。

小松城下似墨屏空翠暁山芝圃　　詩佛

詩佛老人発金城　満城詩盟出送行
青山亭上分手後　後有籃輿相伴聲
松任駅裏風雨夜　刻燭分韻吟到明
明日変作満天雪　四山一白玉崢嶸
豈啻黄金百鎰賜　萬斛瓊沙築前程
更有四人跟随着　莎蓑菅笠一杖軽
粟生渡口渡船上　裘茸結冰肌粟生
陰風怒號海水立　百尺銀濤蹴天轟
侵此風雪不忍別　多情誰如四詩盟

詩佛老人金城を発つ。満城の詩盟は出でて行くを送る。
青山亭上に手を分ちて後。後に籃輿の相ひ伴ふ聲有り。
松任駅裏、風雨の夜。燭を刻し韻を分ち吟じて明に到る。
明日は変じて満天の雪と作る。四山一白　玉崢嶸。
豈に啻に黄金百鎰の賜ならんや。萬斛の瓊沙前程を築く。
更に四人の跟の随着する有り。莎蓑菅笠　一杖軽し。
粟生の渡口　渡船の上。裘茸も冰を結び肌は粟を生ず。
陰風は怒號して海水立ち。百尺の銀濤は天を蹴りて轟く。
此の風雪を侵して別るに忍びざる多情、誰れか如かん　四詩盟に。

粟生の渡船では、荒れ狂う日本海の怒濤を受けて蓑の下に着ていた狐裘の細毛さえ凍り、肌には寒さと恐怖で鳥肌が立った。彼等はここから小松を経て更に山代温泉へ行き、そこでも数日を過ごした。山代では疲れ切った身体を温泉と酒でほぐし、四人の若者達に囲まれて元気を取り戻した。「驪山の夜飲、温泉の雪。疑ふらくは是れ、人生一夢の中と」と（86）。驪山の華清宮で、玄宗皇帝が楊貴妃と過ごした日々のように、夢の中のような日々であった。[注11]

c. 大聖寺以降

山代の後も大聖寺に暫く滞在し、ここでも旧交を温めた。墨屏・暁山・空翠はこの大聖寺まで同行し、その後空翠はこの後も宮駅まで詩佛と同行して京都へと別れていった。大聖寺では坂井梅屋等と詩宴を持った。梅屋がいう。もうこれで会えないと思っていた詩佛にここでもう一度会えたのは、百年河清を待ち得たようなものだ。しかしここで再び詩佛を見送らねばならぬ、その心のなんと辛いことよ、と。（「梅屋詩集」中137）。

送詩佛詩宗還江戸　　坂井梅屋

渇望詩場第一名　渇望す　詩場第一の名。
相迎恰似値河清　相ひ迎へて恰も河清に値ふに似たり。
孤燈未話年来思　孤燈未だ年来の思を話らざるに。
出餞君帰是底情　出でて君の帰るを餞す　是れ底の情よ。

そして詩佛も詠う（87）。

留別大聖寺諸君　　詩佛

侵来風雪太艱難　風雪を侵し来りて太だ艱難す。
且滞江城醉解顔　且く江城に滞りて醉ひて顔を解く。
醉裏無端分手去　醉裏に端なくも手を分ちて去り。
今朝真箇出陽関　今朝　真箇に陽関を出づる。

金沢から来ると大聖寺は陽関といえる。大聖寺を出て最早故人のいない西に向かうのは、陽関を出てウイグルに向かうに等しく、心が引き裂かれる思いがするのだ、と。

かくして詩佛は去った。その滞在中は加賀の文人達に多大な影響を与えた詩佛が去った。金沢の空翠楼に在るというだけで、人々の関心を常に引き続け、「騒人墨客は門前に満ち」「掃盡す、金城十萬箋」と鶴山も詠じる（附35）、時の人詩佛が去った。文化に関心を持つ人なら誰でも一度はその名声を耳にしていたであろう—当代きっての著名人であった、詩佛が去った。

そしてその詩佛が去ってみると、言い知れぬ空虚感を彼等は味わわねばならなかった。伊東半仙の作にいう（附102）。

別後憶詩佛先生　　伊東半仙

羞吾疎懶性　未要一筇扶　　謝客不開戸　護寒須擁爐
瓶梅春色動　歴日歳餘無　　遙思富峰雪　新詩入畫図

羞ず　吾が疎懶の性、未だ一筇の扶も要めず。
客を謝して戸を開けず、寒を護けて爐を須擁つ。
瓶梅に春色は動ぎ、日を歴て歳餘無し。
遙かに富峰の雪を思ひ、新詩を畫図に入る。

半仙はこの作をものした五年後の、文政十二年十月に没した。既にこの時も何かの症状があったのかもしれない。せめて松任まで、せめて大聖寺までと同行したい気持ちは山々だったのであろう。厳冬に戸を閉め切り爐を抱え込んだのは、あながち病気や寒さのせいばかりではなかった。既に暦は師走を迎えようとしている。今頃詩佛は、富士を見ながら東海道を駕籠に揺られているだろうかと思いつつ、その姿を畫に写して新詩を書して添えよう、と。〔注12〕

d. 釈林泉の寄韻

最後に、詩佛の金沢滞留中、京にいて来訪もままならず、寄韻によってその意を伝えた釈林泉の作を示す。林泉は松任の名刹本誓寺の僧で、空翠とは若い頃から共に書を読み字を習った人。京本願寺の雲華大含や日野資愛とも親しく、空翠はこの林泉を通じて二人と通じた。文政十一年の詩佛再々北遊の時には、林泉に加えて詩佛・大含と共に本願寺の陟成園を訪れてもいるが、この媒をしたのも林泉である（附67）。

寄詩佛先生　　釈林泉

曽聴吟杖到金城　曽て聴く、吟杖の金城に到ると。
難奈吾身在帝京　奈ともし難し、吾が身の帝京に在るを。
絶恨佳時両難并　絶だ恨む、佳時は両つながら并せ難きを。
聊将詩句報先生　聊か詩句を将ちて先生に報ず。

［注］以下「再北遊詩草」以外の作品は、作品名と作品番号を記して出典を明確にした。また本文で小集に関する作品は番号で示したが、作品の一部を本文に採った作については、その題号も記した。

注1．この時の小集の日時は西皐の『四宜園』一176詩による。

注2．『大窪詩佛ノート』平成十年八月梓書房刊による。

注3．以上近水楼は（附20・29・62・81・141・162）・「四宜園」（一175）、璞齋亭は（77・78「璞齋小集賦新月」・附22・28「璞齋席上賦新月」・69「奉邀詩佛先生」・82）・「四宜園」（一176）、丹霞は（附87「初冬奉訪詩佛先生空翠楼」）による。なお璞齋邸での新月宴における林蓀坡の参加については、森下家文書によって確認される。

注4．十日の小集は（附66・68「奉送詩佛先生帰江戸」・83・95「四宜園」（184・185）「立齋遺稿」（124）、致堂の送別は「致堂詩稿」（八68）、橘窗来訪は（附48「新雪訪詩佛先生客舎」）、延年楼詩宴は（79「土州大夫延年楼」・附33）、希丸堂小集は（附31・85）「商齋遺稿」（40）による。

注5．『北陸古典研究』27号「文政五年の加越文人」

注6．「霰なた造りの釜」は霰地文を胴周りに打ち出した釜、「蒟醤（きんま）の長盆」は東南アジア、主にタイやビルマで作られた漆器。竹で編んだカゴに黒漆を重ねて塗り、その後刃で模様を引いて色漆を重ねて塗って研ぎ出したもの。江戸時代に伝わり、茶道具として珍重され、現在は香川県の特産とする。「水滴」は硯用の水を入れる道具、「堆朱（ついしゅ）の筆」は朱の漆を何層にも塗り固めて彫って模様をつけた筆。

注7．鹿心齋小集は「商齋遺稿」（41）・（82附32「初冬邀詩佛先生飲別弊廬」・41・49「奉送詩佛先生」・86「鹿心齋小集奉送詩佛先生」）、商齋亭来訪は（81）「商齋遺稿」（30）による。

注8．齋藤氏の石欄は（83「斉藤氏井上石欄」）、看梅・冬夜の小集は（附25「冬夜」）（「四宜園」一187・188）、四屏楼小集は（84・附30・164「游四并楼用四年前詩佛先生韻」、「鹿心齋遺稿」11、「四宜園」一189）による。

注9．（附17・19）による。

注10．以上は（85「小松城下似墨屏空翠暁山芝圃」・附26・34・39・55・64・90・91・108）による。

注11．以上は（85・86「同到山代温泉」・附35・36・165）による。

注12．以上は（87附35「又送到松任駅宿」・40・45・102・166）、「梅屋詩集」中137による。

※訂正

前号（第四〇号）「四．再び金沢での日々」の「a．横山致堂宅聯句」で、この聯句の会場を、現在は辻家庭園となっている別邸海棠園としましたが誤りです。現在の辻家庭園は、致堂詩では「別墅」とされている所です。公務で疲れた致堂が時折りここを訪れて、自然林で囲まれた小荘で疲れをいやしています。なお海棠園は、横山邸の後園の称で、北遊の際に詩佛が命名しました。